

# 新編 知立市史だより

第7号



山屋敷町には現在、稲荷社・津島社・千手観音堂（写真左から）が横並びに建っており、毎年3月に祭礼が行われます。今年の祭礼の調査に行った際、津島社の中に置かれている棟札を見せていただきました（写真右）。この棟札は江戸時代後期のものと思われる、祈ることで疱瘡（天然痘）から免れたり症状が軽くすむと信じられた疱瘡神を祀る祠が、建て替えられたことが分かります。

## 『別巻 文化財編』刊行!!

『新編知立市史 別巻 文化財編』を刊行しました。

知立市には、国指定の知立神社多宝塔や山車文楽・からくりをはじめとして、各寺社が所蔵する絵画や彫刻など数多くの文化財があります。『別巻 文化財編』では、知立市の文化財を多くのカラー写真とともに、詳細に解説しています。

ぜひこの本を片手に、文化財めぐりをしてみてはいかがでしょうか。きっと、知立市の新たな魅力の発見につながります。

## 構成

総論、本文（建造物・絵画・彫刻・工芸・書蹟・典籍・考古・歴史・民俗・史跡・名勝・天然記念物）、寺社・史跡マップ、悉皆調査一覧、指定・登録文化財一覧、遍照院大般若波羅蜜多經調書目録、用語解説



## 刊行記念講演会を開催しました

新編知立市史第三回配本となる『別巻 文化財編』の刊行を記念して、七月二日に知立市文化会館（パティオ池鯉鮒）において講演会を開催しました。

講師は、民俗部会長の鬼頭秀明先生と文化財委員会委員長の鷹巣純先生です。両先生とも多くの写真を使用し、熱い講演をして下さいました。

当日は約一二〇名の方々にご参加いただき、知立市の文化財について知っていただくことができました。

## ■内容（講演要旨は二頁をご覧ください）

・鬼頭秀明氏（民俗部会長 民俗芸能研究家）

「知立祭をめぐる文化財―雨乞いから山車祭礼―」

・鷹巣純氏（文化財委員会委員長 愛知教育大学教授）

「知立市の仏教美術」

平成二十九年三月には、『資料編 近代・現代』を刊行予定であり、その後、刊行記念講演会を開催します。講演会の日程や内容などの詳細については、改めて市の広報やホームページに掲載します。ぜひ、ご参加下さい。

## 講演要旨

### ■「知立祭をめぐる文化財―雨乞いから山車祭礼―」 鬼頭秀明



本講演では、祭礼に係わる文化財の調査から色々なことが分かることや、「知立祭」がどのような歴史を辿り、現在につながっているのかを解説しました。

まず「知立市域の祭礼文化」というテーマで、現在の知立まつりで本祭の年に大グルマ（山車）、間祭の年に小グルマ（花車）が交互に出されるのは、江戸時代に、刈谷と交互に祭礼車を曳き出す祭礼を行ってきた伝統によることなどを説明しました。

次に「知立神社の祭礼文化財」では、知立神社の歴史や信仰、神社に伝わる神輿・獅子頭・仮面・蛙面の宝物や多宝塔について解説しました。舞楽面や能面の仮面からは、知立神社では古く祭礼に舞楽と能が行われていたことが知られます。また仮面は芸能衰退後に雨乞いの呪物として伝えられ、能面には砂粒痕らしきものが残っています。これは、雨乞い神事を行った痕跡だと思われれます。

最後に「知立の山車祭礼」について、山車の形態や文楽・からくりの特徴について述べました。知立の山車文楽とからくりが、熱田など尾張地方の古態山車一形態である大山からの伝統を受け継いでいることなどを紹介しました。

### ■「知立市の仏教美術」 鷹巢 純

『新編知立市史 別巻 文化財編』では、編さんにあたって市内寺院の文化財調査をくまなく実施しました。講演冒頭では彫刻を例に、標準的な調査の方法を紹介し、そうした方法で解明できる事柄について説明しました。特に必要な場合は、エックス線撮影や赤外線撮影といった光学的調査も行いました。慈眼寺の阿弥陀如来立像からは毛髪や歯と推測される像内納入品の存在が明らかになりました。また、いくつかの絵画では、不明瞭な墨書の解読や下描きの墨線の確認もできました。

次に知立市の文化潮流と深くかかわる文化財として、在原寺の釈迦涅槃図と無量壽寺の売茶翁肖像、そして総持寺の愛染明王坐像を紹介しました。谷文晁の原図に基づく釈迦涅槃図は、在原寺復興を記念して売茶翁に贈られたものと思われれます。また、売茶翁肖像は、彼の正式の肖像としての風格があります。いずれも近世知立の文化を高めた売茶翁をめぐる名品です。愛染明王坐像は神仏習合が行われていたころの知立神社の信仰を示すものです。

最後に、泉蔵教会と来迎寺の釈迦涅槃図が共通の図像をもとに制作されたものであることを紹介しました。これは多くの寺院の調査を並行したからこそ判明した事例です。



## 抜け殻からみる「知立のセミたち」

平成24年から26年の3年間で、自然部会生物班は、市民参加によるセミの抜け殻調査を行いました。抜け殻を調べることによって生息しているセミの種類が分かります。この3年間で集まった抜け殻の総数は3万2千50個、集めていただいた協力者総数は約1千330人と多くの方々により貴重なデータを得ることができました。深く感謝申し上げます。

日本で生息しているセミ35種のうち、知立市で生息しているセミは、アブラゼミ・クマゼミ・ニイニゼミ・ツクツクボウシの4種であることが分かり、さらに知立高校の調査によりミンミンゼミも確認されています。各年ともアブラゼミ35%、クマゼミ65%の比率ではほぼ同じ割合でした（表）。クマゼミは南方系のセミで、もとは温暖な九州を生息域としていましたが、20世紀後半から、西日本から東日本へと全国的に分布を広げています。

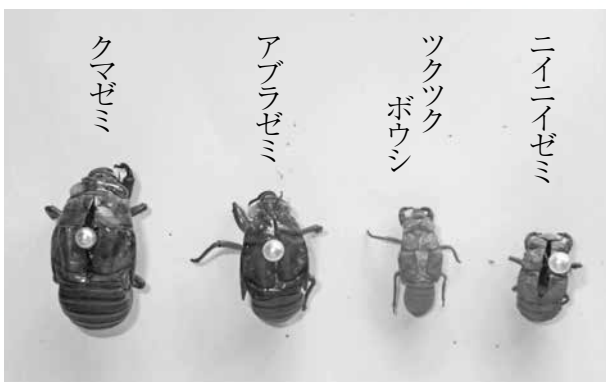
知立市でもかつてはアブラゼミが優占種でクマゼミは少数派でした。クマゼミの幼虫は、暖かくて乾いた環境を好み、地球温暖化やヒートアイランドなどとも関係があるとされています。その一方でアブラゼミの幼虫と成虫は、クマゼミに比べると湿度の高い環境を好むと推測

	H24年	H25年	H26年
アブラゼミ	3045個 33.6%	5555個 33.6%	2376個 36.8%
クマゼミ	5969個 65.8%	10934個 66.2%	4062個 63.0%
ニイニゼミ	58個 0.6%	33個 0.2%	10個 0.2%
ツクツクボウシ	3個 0.0%	3個 0.0%	2個 0.0%

表 3年間のセミの個数と割合

されています。このことから都市化の進んだ知立市では、クマゼミのすみやすい環境であることがいえます。

知立市において、ニイニゼミやツクツクボウシはかなり少なく、この2種はクマゼミが増えると同全国的にも同時に急激に減少したといわれています。特にツクツクボウシは、平地から山地まで幅広く生息していますが、基本的には森林性のセミなので、生息できる環境が限られます。3年間の調査により、ツクツクボウシが生息していると思われる場所は、弘願坊・遍照院・谷田神明社・浄教寺だと分かりました。また、ニイニゼミの場合は、弘願坊が一番多く、他には谷田神明社・浄教寺・無量壽寺です。この2種は、自然度を表す指標ともいわれ、神社やお寺などが多様な環境を持ち、生き物にとって重要な場所とも考えられます。



次にセミの一生の生態についてですが、枯れ枝や樹皮に卵が産みつけられ、卵はその年の秋か翌年の初夏に孵化します（セミの種類によって異なるが孵化には2か月から1年かかる）。孵化した幼虫は土の中に潜り、木の根の樹液を吸って成長し、土の中で2年から4年ぐらいい過した後、地上に這い出して木に登り、脱皮して成虫になります。つまり、セミにとって、好む樹種があることと地上に這

出すタイミングが大切です。セミは樹種に嗜好性があるといわれており、気温や乾燥などの気象条件の他に、植栽の木の種類やもともとの樹種によっても影響を受けるものと推測されます。例えば、アブラゼミは多様な樹種を好み、クマゼミは大型になる落葉広葉樹であり、ニイニゼミやツクツクボウシは限られた樹種を好むといわれています。今回の調査では、樹種との関係までは調べていませんが、知立市での分布を考えるには必要な要因であると思います。

平成25年度の学区毎の種の割合(図1)の中で、知立東小学区は、クマゼミが88%・アブラゼミが12%と、最もクマゼミの比率が高く、それに対して来迎寺小学区は、クマゼミが33%・アブラゼミが67%と、唯一アブラゼミが多い学区になりました。神社やお寺における割合(図2)をみると、弘願坊(谷田町知立南小学区)や浄教寺(八橋町来迎寺小学区)が、アブラゼミの多い場所となりました。このうち弘願坊の場合は、クマゼミの多い学区全体とは異なる割合になっています。また、知立神社(西町知立小学区)は、学区と同様クマゼミの多い場所となりました。知立神社は国道1号線沿いにあり、乾燥した環境であることを示していると考えられます。

夏の風物詩であるセミたちは、自然環境の中で敏感に対応して生きていますが、人間活動との関わりも深く、少しでも多様なセミが生息できるには、何ができるか考えていきたいと思っています。

(自然部会 調査協力員 小鹿登美)

図2 神社やお寺での種の割合

1…アブラゼミ 3…ツクツクボウシ  
2…クマゼミ 4…ニイニゼミ

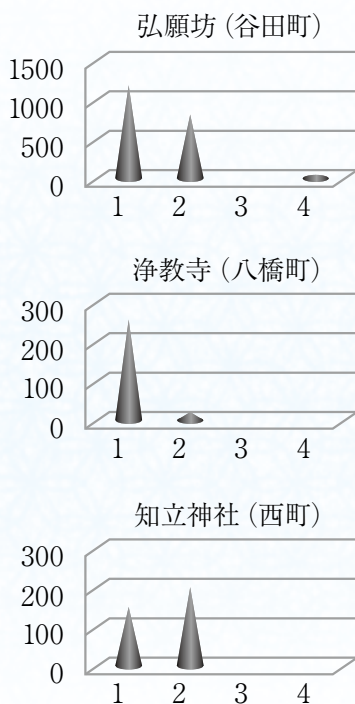
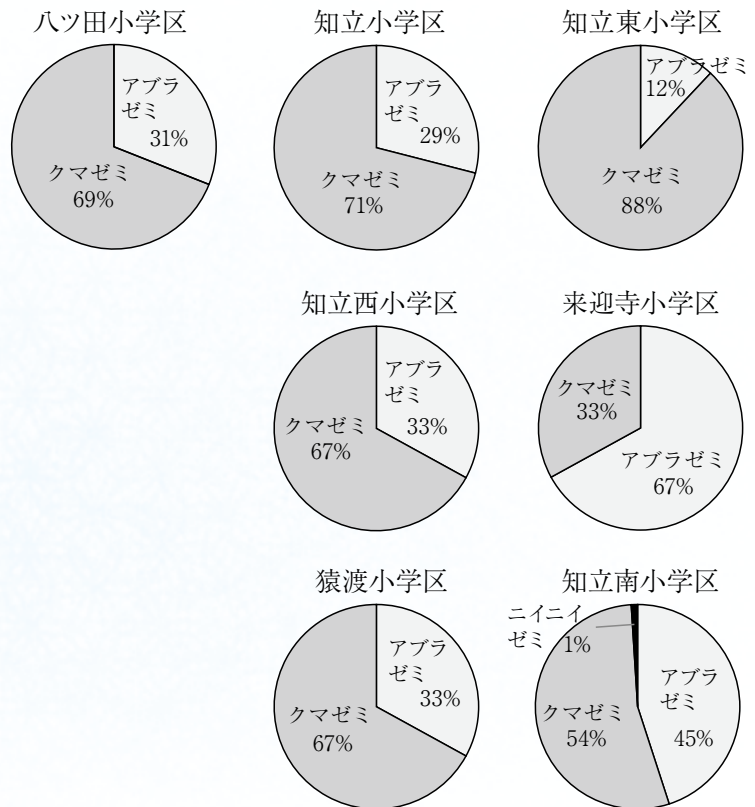


図1 学区毎の種の割合



## 明治十四年三月・明治用水・内藤魯一

内藤魯一といえは、全国的にも有名な自由民権運動の闘士・指導者として注目されてきました。研究史では、民権運動が生成展開する全国的な拡がりを掘り上げることが重視され、内藤は、運動が盛んな愛知県を代表する一人として取り上げられてきました。

長谷川昇著『博徒と自由民権』（一九七七年）をその先駆とし、知立市の刊行物である『知立市史 中巻』（一九七七年）、『内藤魯一自由民権運動資料集』（二〇〇〇年）や、『愛知県史資料編24政治行政1』（二〇一三年）も、その系統に属するものです。

今年度刊行の『新編知立市史6資料編近代・現代』では、こうした先行研究の厚い蓄積があることや、掲載頁数の制約があることを考慮して、民権運動そのものは、取り上げませんでした。しかし、視点を変えれば、別の一面が見えてきます。すなわち、全国的な政治社会運動につながる動向を重視する視点ではなく、地域社会における利害関係を同時代の状況に即して捉える視点が、それです。

その一例が、明治用水です。工事着手は明治十二年（一八七九）一月ですが、工事資金の調達をめぐる諸問題が発生しました（『新編安城市史3通史編近代』二〇〇八年）。中でも、特に深刻な対立を引き起こしたのが、「分水慰労金」の問題です。分水慰労金とは、用水工費を負担した出資者たちが、出資の見返りとして、灌漑（用水路から水を引き込み土をうるおす）地の地主から一反につき二円の割合で受け取るものであり、当該地主にとっては用水灌漑を受けられる権利に相当します。数千町歩におよぶ灌漑予定面積からすれ

ば、その金額の大きさが分かるでしょう。

当初の予定では、これは、出資者たちのものになるはずでした。ところが、工事計画を愛知県が大幅に拡張したこと、出資者たちが予定通りの金額を確保できなくなったこと、この二つの理由から、資金不足が深刻化しました。県は、明治十二年六月から数度にわたり多額を融資しました。翌年六月、融資金の返済が問題になった時、県は、融資を受けた出資者たちに、過去に実施した融資の内の一万円について、分水慰労金の権利で相殺するように、半ば強制しました。

そして県は、明治十三年末から翌年初めにかけて、十四年三月頃までに分水慰労金を支払うよう求めました。これに対して、碧海郡の一部の村（八ツ田村・谷田村・西中村・篠目村）は、十四年三月、連名で県にこの慰労金の要求に強く抗議する文書を作成しました。この文書では、用水関係村々総代を集めた「議会」を開いて地域住民の意思を確認し、その意思を代表して県と交渉することを上重原村住民の内藤に委任することが書かれています。

出資者たちの権利が県の「圧制」により事実上、強奪されたことへの同情と、県が分水慰労金を強制的に徴収することへの反発が、こうした異議申立運動を引き起こしました。

今回の資料編では、こうした内藤魯一と地元との関係を示す資料や、地租改正への不満が尾張のみでなく三河、特に碧海郡で強くそれを宥めるため、三河全体に政府資金（「起業殖産金」）が、散布されたことを示す資料などを掲載しました。

（近代・現代部会 調査執筆委員 伴野泰弘）

# 活動記録

(平成27年9月1日～28年8月31日)

## 編さん委員会

28年8/16

## 編集委員会

27年10/2

28年1/22、4/8、7/8

## 部会

### 考古部会

27年12/27

28年7/29

近隣自治体へ遺跡や遺物の調査に行くなど、通史編に向けて活動しています。

### 古代・中世部会

27年9/4

28年4/22

通史編に向けて頁数の割り振りが決まり、章節項について考案しています。

### 近世部会

27年11/3

28年2/21、6/26

資料選定及び翻刻・入力の作業を進めています。また章節項も決まりつつあります。

## 近代・現代部会

27年9/6、10/24、12/12

28年1/10、2/14、3/13、4/24、

5/15、6/5、7/10、8/26 (聞き取り)

28年度刊行の資料編に向けて、原稿の校正作業を行っています。

## 民俗部会

27年12/5

28年3/22、4/15 (打ち合わせ)、8/30

27年調査・聞き取り

9月秋葉まつり関係、10/3個人

28年調査・聞き取り

1月～5月知立まつり関係、1/16山屋敷

町、2/11個人、3/2個人、3/6山屋

敷町祭礼、5/11個人、6/6個人、6/

11個人、6/18個人、6/24知立中学校、

6月～秋葉まつり関係、8/28個人

知立まつり・秋葉まつりのDVD編集作業や、粗原稿の検討会を行いました。聞き取り調査も進めています。

## 自然部会

27年10/31

28年1/30、6/4

### 生物班

27年9/13合同調査・ライトトラップ、

11/22会議

28年2/27会議、7/9動物担当打ち合わせ

### 地形・地質班

27年11/7調査

順調に調査が進んでおり、原稿執筆に取りかかっています。また、データ解析や図・表などの作成も行っています。

## 文化財委員会

27年10/25

27年度は、原稿の文章校正及び厳密な写真の色校正を行い、『別巻 文化財編』を刊行することができました。ぜひ、ご覧になって下さい。

## 八橋グループ

27年9/24 (打ち合わせ)

28年1/18

物語や和歌、美術工芸品など、八橋に関する資料を調査・収集しています。

## お礼

市史編さん活動に、様々な所で様々な方々にご協力・ご教示を賜りました。心よりお礼申し上げます。



好評販売中

■新刊

『新編知立市史 別巻 文化財編』

A4版オールカラー 二六〇〇円

■既刊

『新編知立市史3 資料編 原始・古代・中世』

B5版二冊箱入 四五〇〇円

『新編知立市史5 池鯉鮒宿本陣御宿帳』

B5版 二六〇〇円

『新編 知立市史』は、市役所市民課の窓口または歴史民俗資料館でお買い求めいただけます。郵送(送料別)もできますので、詳しくは知立市ホームページの、「組織から探す」→「文化課」→「知立市歴史民俗資料館」→「刊行物案内」のページをご覧ください。

ぜひ、お買い求め下さい



知立市マスコットキャラクター  
ちりゅっぴ

刊行予定

『新編知立市史6 資料編 近代・現代』

平成二十九年三月刊行(予定)  
B5版六〇〇ページ 四二〇〇円(予定)

現代社会の基礎を築いた明治・大正、戦争を契機とする激動の昭和、そして平成へ。当時の知立の姿や関連する人々の軌跡を明らかにするため、約八年にわたり膨大な資料調査を行いました。

その成果を踏まえ、当巻では、各時代の行政や教育・産業・生活・文化のほかに明治用水や鉄道・道路の交通網整備、度重なる戦争など、多岐にわたる特徴的なテーマを取り上げています。

新出資料や従来あまり注目されなかった資料を多く用いて、詳細な解説とともに知立のあゆみと現在を紹介します。

お問い合わせ

知立市教育委員会文化課市史編さん係

〒四七二一〇〇五三

知立市南新地二丁目三一三(歴史民俗資料館内)

TEL 〇五六六一八三一六七八九

FAX 〇五六六一八三一六六七五

E-mail sisi-hensan@city.chiryu.lg.jp

新編知立市史だより第七号 平成28年10月16日発行

発行 知立市教育委員会文化課市史編さん係